



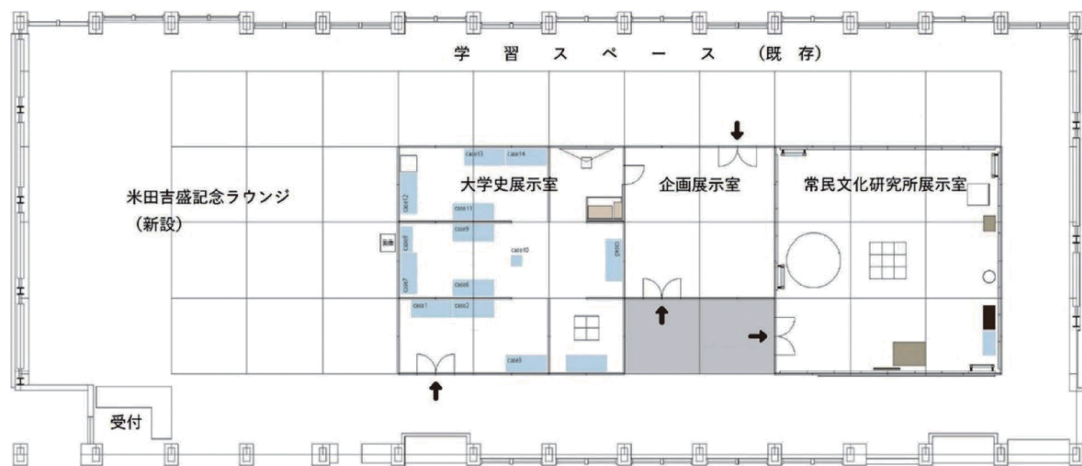
実施報告 植民地台湾の紙芝居パネル展 —国立台湾歴史博物館コレクション—

会期：2023年2月1日（水）～2月28日（火） —みなとみらいキャンパス 1F

2023年5月10日（水）～6月30日（金） —横浜キャンパス 3号館 1F 企画展示室

報告者：中村 裕史（非文字資料研究センター 職員）

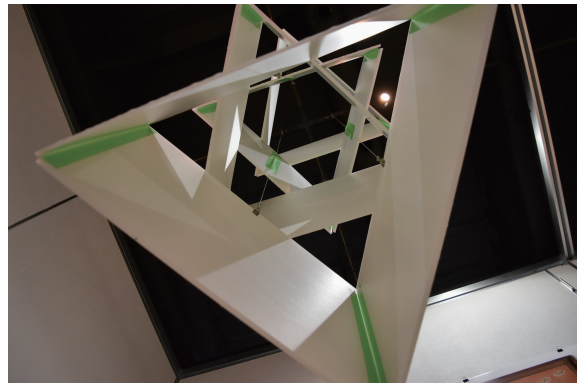
2023年3月末、横浜キャンパス3号館の展示ホールがリニューアルオープンした。今回のリニューアルにより、3つの展示室（大学史展示室、常民文化ミュージアム、企画展示室）、学習スペース、多目的に利用できる米田吉盛記念ラウンジの3つのゾーンが設置され、このエリア全体が「ミュージアムcommons」と名付けられた。展示を中心とした大学の歴史や研究成果の発信の場、そして地域にも開かれた学習・交流の場となった。企画展示室については学内から広く企画を募集することになっている。今回、企画展示の第一弾として非文字資料研究センターが〈植民地台湾の紙芝居パネル展—国立台湾歴史博物館コレクション〉展を実施した。これは2023年2月にみなとみらいキャンパス（以下、MMC）で実施した展示を圧縮して新たな資料を加えて再構成したものである¹。



企画展示室ではパネルを壁面に張り付けて構成するため、2次元の紙芝居を壁面に貼り付けると、どうしてものっぺりとした印象になってしまう。試行錯誤した結果、新たに作成したパネルを三角形に組んで天井から吊るして変化を付けることにした。A2サイズのパネル3枚を組んで三角形を作り、天井からワイヤーフックを三本垂らしてそこに吊るす。これを土台として、その上に、同じように作成した三角形をずらしながら段々に重ねてい



く。安全のために、三角形の3辺とワイヤーが重なる内側の箇所をガムテープで固定する。そのようにしていくと、パネルの自重によってかなり安定した立体物が完成する。やってみると意外と簡単にできる。天井から吊るすパネルに使用した画像は、台湾土産として人気のあった当時の絵葉書²、それから『大東亞戦争と臺灣青年：寫眞報道』³を使用した。MMCでの展示を見て感じたことは、紙芝居のパネルだけだと当時の台湾の人々の



生活風景が浮かびづらい。そのため、当時の街並みや特徴的な植物、先住民の暮らしなどが写された絵葉書を使うことで、少しは当時の台湾に思いを馳せることができると考えた。手のひらサイズの絵葉書をA2サイズに拡大してみると意外と迫力があり訴求力が生まれた。また、『大東亜戦争と臺灣青年』には戦争に動員される台湾の人々の姿が記録されている。異国情緒溢れるほのぼのとした絵葉書の雰囲気とは異なり、戦争の暴力的な実態を考える材料になると考えた。

実物展示としては、台湾絵葉書と『大東亜戦争と臺灣青年』、それから紙芝居『みのる秋』をガラスケースに並べた。『みのる秋』は2018年11月の戦時下日本の大衆メディア研究班の研究會において台湾呉鳳科技大学の學生が台湾語と日本語で実演した作品でもある^{iv}。

今回の企画展示では、国立台湾歴史博物館（台史博）からパネル4枚分の博物館紹介データの提供を受けたので、パネル化して展示室入り口に並べた。また、台史

博の日本語版パンフレットを送っていただいたので、観覧者用配布物として活用させていただいた。台史博を紹介することもできて、協定締結記念の展示として意義深いものになったと考える。

【注】

- i みなとみらいキャンパスでの展示の実施と、そこに至る経緯については、NewsLetter50号の新垣夢乃研究員の実施報告をお読みください。
- ii 原色版 臺灣繪葉書『臺灣蕃人風俗集』、『臺灣乃果物』、『臺灣情調』。いずれも日本常民文化研究所の所蔵で出版年は不明。
- iii 『大東亜戦争と臺灣青年：寫眞報道』山本地榮、朝日新聞社編、朝日新聞社、1944。
- iv 研究會については非文字資料研究センターホームページ参照のこと（<http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/news/2018.html>—アクセス2023.6.20）。なお、実物展示した『みのる秋』は日本本土で発行されたものであり日本語のセリフのみが掲載されている。台湾呉鳳科技大学の學生が実演した台湾版には日本語と台湾語のセリフが併記されており、今回はその一部レプリカを参考資料として展示した。

